思い出

有終の美を母校で迎えて

第21代校長　**大城　順子**

私は、1967年（昭和42年）3月に琉球政府立前原高等学校を卒業した。教員としての母校勤務もなかったので、平成19年4月の校長赴任は、実に40年ぶりの母校への帰還であった。「自分の地域・地元で、恩返しと思ってやって来なさい」と言われたのだと有難く受けとめた。私の宮仕えの最後を、やり残しの無いように、母校においてしっかり務めようと思った。我が有終の美を母校で迎えられることに感謝した。

入学式の日、90歳になる地域出身の元校長からの激励の電話、70歳を過ぎた同窓の先輩の来訪に、地域や同窓の本校に対する熱い思いを格別に身にしみて感じたものである。

校長として母校に赴任して2年、いろいろと考えついたことをできるだけ実践してきたつもりである。校長に振り回されたとかいろいろやらされたとか思っている職員もいたであろう。だが私に言わせれば、私に選ばれた彼らは、それをチャンスに変えていく能力が試されたのだといえるし、新しいことにチャレンジすることで自らの能力を開花させたのだともいえる。そして、前原高校は、我々がやった分だけ少しずつではあるが確実に、目に見えて成果が出始めたのである。私は、何よりも職員や生徒との人間関係において、それを実感した。特に生徒とのやりとりは、毎回腹立たしい驚きや思わぬ発見の連続で、また生徒たちの現状に社会への義憤も感ずることが多かった。しかし、彼らの心根に触れるとき、癒やされることや嬉しく楽しいことも多く、充実した日々であったと思う。

振り返ってみると、学校経営の要は「学校論、教師論、授業論のあらゆる点で職員と議論し合い、共通理解し、方向性を示し、職員全体を束ね、彼らのやる気に火を点けること。素早く判断し、的確に指示すること。」だというのが、私の結論である。そのためには、自分自身がよく学び、真摯に実践し、本音で語ることであった。それを何とかこなしてきたと自負している。また、それが学校改革への道でもあったと考えている。しかし、私は特別なことをやったとは思わない。どの校長も、どこの高校でも、皆似たような試みを一生懸命取り組んでいるのだと思う。

在職中に実施したこと

1　職員に対する「校長としてのメッセージ」を継続的に送り続けた。

「校長からのメッセージ」や「校長会報告」を通して教育界の動向などの情報を提供し、校内で気づいたこと・感じたことを「職員へのお願い」「○○教科へのお願い」という形で伝えた。

2　職員朝会が、大広間にバラバラの自由勝手な座り方だったので、職員の席を学年別に配置した。

全職員の意志疎通と共通理解を図るため、職員を職員室前方1箇所に纏めたことは、校長をはじめ全職員が共に同じ方向に向かって事を成す姿勢を醸成するのに有効な体制づくりだと考えるからである。また毎週水曜日朝会には学年会を定例化し、学年間の情報の共通認識を図った。

3「学力向上対策」並びに「体育・スポーツ推進校」の研究指定校を引き受け、その実践を通して、職員の研修体制が構築され成果もみえた。本校国語科が、沖縄県高等学校国語教育研究会において会場校を引き受け、研究授業の発表を行ったのもその成果の一つであろう。

4 生徒への働きかけ……「意見箱」を設置し、「校長からの返事」を発行した。

生徒の言い分を聞き、それに対してきちんと回答する・応える姿勢を堅持した。生徒たちが次第に落ち着

きを取り戻していくのが目に見えて分かった。

☆　月1回の各学年集会の定着（1週…1年、2週…2年、3週…3年、4週…全体）

☆　生徒会を育てるため「リーダー研修」を実施。

☆　生徒会や部活動代表会を組織化、強化していく中で、生徒や職員の自主的な発案で「前原カップ」が誕生、実施された。

☆　「子どもたちによる『いじめ根絶運動』支援授業」の研究協力校を引き受け、各クラスに生徒リーダー・ボランティアを育てる試みを行う。全職員が、ピア・サポート研修やQUテスト実施等によって生徒理解に努めた。

☆　特進クラスへのてこ入れ。意識高揚のための講演会や「宿泊勉強会」を実施。

☆　部活動推進及び全国高校総体2010の生徒募集のための取り組みを強化する。
（パンフレットの作成と配布、中学校への働きかけ、垂れ幕の掲示など）

5　生徒指導については、県教委からの中退加配・スクールカウンセラーを獲得する。

☆　授業態度不良者および授業妨害者への指導として「イエローカード制」を導入。

☆　生徒指導（服装容儀の帰宅指導・遅刻指導・欠課指導）の充実・強化。

☆　「トイレ掃除大作戦」の実施。（地域実業界やボランティアとの提携）

6　生徒たちの母校愛や自己尊厳意識の醸成を目指し、地域や同窓との繋がりの意識化させるため、「湛水講演会」を実施した。全校の各クラスに1名ずつの同窓生を配置し、前期、後期の年2回実施。（後に、教務部・総合学習に位置づけ校務化した）

7　「前原高校ホームカミングデー（肝高の集い）」の実施。

同窓をはじめ前原高校に縁のある全ての人々の絆を深める集いとする。地域が同窓が常に学校を生徒たちを見守っているのだという意識を涵養するためである。

8　施設関係……グランド改修工事。武道場の清掃修復工事。

☆　本校は豊かな緑の樹木が多い。しかしそれだけでなく、花の咲く明るく癒やしの空間を持つ学校を目指して、校門左側横に花壇設置。その結果、樹木や雑草に埋もれ隠れていた40余年前の「湛水苑」石碑がお目見えした。

☆　生徒の安全確保のため、校門から体育館への車両進入路の変更と新設。

☆　「定時制廃課程碑」を目立つように「肝高碑」の後方に移動。

☆　第21期生「同期の桜」を植樹寄贈（校門左）。同21期生「校歌CD」を寄贈。

9　PTA総会2回実施。400人程度が参加した。

☆　PTA研修を「県民大学講座」と連携させて4回実施。毎回30人程が参加した。

☆　小型トラック（作業用）、大型バス（29人乗り）の購入。

校長としての2年間は、迷いながらも自分なりにこれだと信じてやってきた。こうして列挙してみると、今更ながら有形無形のいろいろなことがあるものだと思う。そして、私の思いをきちんと受け止めて実行してくれた教頭をはじめとする全職員の力に負うものであることが分かる。職場というものは、育ちも性格も違う多様な人間が集っている。互いによい仕事がしたいと考えているし、互いに認めてもらいたいと思っている。大人でもそうであるのに、生徒はなおさらであろう。「教師はプロ。専門家。先ず生徒を認めることが第一。」それが私の根底にある。そういう議論を何度やったことだろう。私の言葉を真っ正面から捉えて、反論してくれた職員たち。よく噛みつき食い下がってくれた。その中で私も考えを練り直しながら成長したと思う。議論のできたよい職場であった。よい仲間・部下に恵まれたと思っている。得難い2年間、有難い2年間であった。

前原高校の“お宝”

夏季休業中に校長室の本棚の上にほこりだらけの汚い扁額があるのを見つけた。文字は「清修自守」（行いを清く調えて、自らを大切に守っていく）。一見誰でも書けそうな稚拙ともみえる作品だが、伸びやかで味わいのある文字面である。紙は黄色く変色し、シミが入り、額も紙も破れている。何も被せることもせず、仰向けにほこりをかぶったまま置かれている。次のコメントの紙片がつけられていた。

「清修自守　己亥秋篁」「1972年没の近藤秋篁の1959年（己亥）の作品ではないか？」「どういう関係で（この作品が）前原高校にあるのか？（1958年に現在地田場に移転）」「伊覇和男の調べによる」「2003年9月和男と松根（正廣）」

これは調べてみる価値があるだろうと思った。10月に南城市で「お宝探偵団」というテレビ番組があるというので、これに出してみようかなどとミーハーなことを考えたりした。

暮れになって、書道専門部の小橋川学教諭（故人・当時普天間高校勤務）に頼んで調べてもらった。

近藤秋篁（1889年～1973年）　明治を代表する書家である日下部鳴鶴の弟子、吉田包竹に師事。松井如流、山下涯石とともに包竹門下の“三羽烏”といわれた。

温厚篤実な人柄を反映する品格を持った”正統派”の書風で知られる。

小橋川曰く、「『日本書道史』に大きく名を残したわけではないが、近代日本の書の一端を担った素性の確かな人物なので、前原高校にある作品が、一見稚拙な印象の作品であっても、実際は奥の深い味わいのある作品かもしれません。」

本当にどうしてこの作品が前原高校にあるのだろう？　あれこれ考えた末に、前原高等学校の生き字引と評されている翁長維行先生に尋ねることが一番だと思い至った。先生はこの2,3年は大病を患った後、体調を崩され外にはほとんどお出にならないようであった。

私の訪問を快く迎えてくださり、開校の頃からの貴重なお話をいろいろと伺った。そして、この扁額については、さらにビッグニュースを聞かせていただいたのである。

翁長維行先生の話の概略

前原高校が、与那城村西原にあった頃、書道教諭として東恩納千鶴子先生が居られた。彼女はその後、上京して勉学を重ね、帰郷すると琉球大学の教授になられた。翁長先生とは前原高校同僚という縁でずっと懇意にしておられたそうである。

昭和33年6月、前原高校が現在地の田場に移転した頃、翁長先生は「この機会に名のある方の書を手に入れたい」と東恩納先生にお願いした。東恩納先生は多分に師であった方々の書を手に入れてこられたのであろう。たたまれた半切紙をいただいたという。それを東恩納先生の縁で石川市の業者に頼んだ。1つは額装に、1つは軸装にしたということであった。翁長先生は、額装の作品のことは覚えておられなかった。彼が明確に覚えて語られたことは、次の通りである。

「素晴らしい作品がありましたよ。軸にして、家庭科室の床の間にかけました。鈴木翠軒という方の仮名文字で短歌が書かれていた。歌はよく覚えている。「けふもまた 心の鉦を 打ち鳴らし 打ち鳴らしつつ あくがれてゆく」でしたよ。君の話によると、額は残っているようだが、あれは掛け軸だからもうないでしょうなあ。」

早速、学校に帰り、家庭科室を探した。ここ4,5年ずっと締め切ったままだという家庭科和室の床の間に破れかけたままの書軸が下がっていた。これが翁長先生のおっしゃられたものかどうかわからなかったが心が震えた。家庭科は廃科になったり、教室棟が作り直されて移動したりと、変遷があった。掛け軸は持ち運びもしやすいし、捨てやすくもあるので、おそらくもう所在はつかめないだろうと覚悟していた。奇跡であった。恐る恐る取り外して広げてみた。淡墨で、何とも言えない味わい深い感動的な書であった。左下が切れ

て破けている。欠落した部分もある。シミもあり、かなりの傷み方であった。

調べてみると、鈴木翠軒は、たいへん著名な書家であった。未だに古美術商が作品を探し求めている。小中学校の書道教育に参加し、戦前の国定教科書の手本を揮毫されている。この短歌は若山牧水の歌である。

鈴木翠軒　明治22年～昭和51年（1889年～1976年）

丹羽海鶴に師事。晋唐の楷法を追求。日本近現代の書道界の巨匠。

良寛・寸松庵色紙・一条摂政集を土台とした淡墨による日本的叙情美を完成。

日本芸術院会員、1968年文化功労者。

私は、卒業後40年経って母校に赴任した。そして高校文化連盟の書道専門部会長を仰せつかった。これは単なる偶然や縁ということではなく、何か運命的で必然的なことなのかもしれない。この二つを発見しきちんとすることが、私の使命なのかもしれないと考えた。早速あちこち訪ねて、沖縄県の文化財修復を一手に引き受けている業者を探し当て、永久に保存できるように文化財並みの修復を、とお願いした。石川堂（せきせんどう）は、「これは祖父の手になる装丁です。見てわかります。」と懐かしそうに言い、平成20年2月13日に預かっていった。以来やきもきして待った。8月20日、とうとう出来上がって帰ってきた。現在校長室に掲げられている。

私が赴任したとき、校長室には、創立60周年を記念して、下地武夫（春渓）先生の見事な揮毫で、校訓の「進取・誠実・奉仕」が掛けられていた。図書館には、新館移動の際にでも揮毫されたのか、運天清正（清峰）先生の清冽で力強い「質実剛健」が掲げられている。（両先生とも本校の旧職員である。）

ところで、昭和40年（1965年）11月、創立20周年記念に図書館が建設設置された。（同時に校歌も変更された。）その図書館正面に掲げられたのが、東恩納千鶴子（松園）先生の扁額「教学一如」である。私は毎日この扁額を目にして図書館に通った。清澄な感じの風格のある文字面で、懐かしい扁額である。（教えることは学ぶこと、学ぶことは教わること、教えることと学ぶことは表裏一体である。教える者も教えられる者も、共に相手から学び、教わっているのである。……人を育てようとする努力が、学ぼうとする意欲に火をつけ、互いに自分自身を向上させていくの意で前原高校の教育の理念である。この扁額は、おそらく旧図書館の取り壊しと新校舎建築により外されたままになっていたのであろう、倉庫の隅に取り残されていた。校訓額は、全校生徒が日常的に目にすることができるようにと、体育館入り口正面に移した。「教学一如」は、校長室を飾っている。

その他、校門中庭の「肝高」の碑は50周年を期に建てられ、旧職員山城朝計先生の手になるすばらしい作品である。書作品以外でも同窓や本校ゆかりの人々の思い出の痕跡は多い。、校門前左側園庭には、21期生の還暦記念の桜の木と「隗より始めよ」の石碑がある。校門の門扉は、多分創立20周年を期に、1965年当時の卒業生の記念品で、50年後の現在もなお健在である。2012年に6期生が贈った、現代の名工・新垣栄用氏のシーサー1対、1973年に12期生が贈った同期の金城実氏の彫刻「苦悩する青年の像」は、玄関先に鎮座している。その他校内を散策すると、定時制や教育課程の廃科など、その時その時の変遷を思い起こさせる小さい石碑が存在している。

これらの作品は、前原高校の歴史と伝統に根ざした宝である。戦後すぐに具志川村前原地区の収容所の中で開校した本校が、与那城村西原、そして具志川村田場へと移転を繰り返してきた歴史のそれぞれの節目の中で、多くの人たちの思いを伝えてくれるよすがとなる作品である。その上、関わった方々がもう既に故人になられたりして、たいへんに貴重なものとなっている。これからも大切に引き継いで保存していってもらいたいと思う。

私と『前原』

第22代・第24代校長　具志堅　侃

創立70周年、誠におめでとうございます。今回、前原高校22代・24代校長として記念誌に寄稿させて貰うことになり、とても嬉しく思うと同時にその間協力していただいた皆様に感謝申し上げたいと思います。

さて、私はこの前原に生徒として・教師として・校長として、計16年関係してきました。定年後も同窓会副会長として関係しておりますが、私が母校「前原高校」でやってきた事、そして想いを少し語らせて貰いたいと思います。

1969年（昭和44年）4月、心躍らせて天下の前原高校に入学し、スポーツ・勉強に頑張ろうと意気込んでいた。しかし、その当時は米軍関係の事件・事故が多発し、米軍の各ゲート前での抗議行動がよく行われていた。また、学生運動もすごく盛んに行われており、校舎屋上のバリケード事件も今では懐かしい思い出となっている。そんなことから避けるように私は部活動に励み、インターハイを目指し、3年間卓球に明け暮れた。インターハイ出場を果たせなかったことから自分が教えた子どもたちをインターハイに出場させてやるとの一念で教師の道に進んだのである。

1979年（昭和55）の南部農林高校を皮切りに普天間高校、そして前原高校に平成5年4月より就任し、かつての文武両道の名門校として名を馳せていた母校は、その面影は薄く学校全体の活気も今ひとつだった。その活気を取り戻すべく、当時の校長嘉手川繁二先生、体育科の宮城先生・社会科の座間味先生等を中心に学校活性化のため、より生徒のニーズに対応した教育課程を編成し、特色ある学校づくりに取り組み、平成6年より体育コース・英語コース・人文コース・理数コースのコース制を実施した。

特に体育コースの活性化では、特色としての各学年の研修でキャンプ・マリン・スキー実習、スポーツ重点種目を取り入れたより技術向上が可能な授業の展開をしてきた。重点種目の成功に向け体育科の先生方を中心に各部活監督が優勝を目指し、日々の練習に励み、見事3年目には体育コースの全員が（重点種目：野球・卓球・バレー・バスケット・剣道）九州大会・全国大会（甲子園・インターハイ・春高バレー）に出場を果たすなど輝かしいスタートをきれた（ちなみに、私は卓球部の監督として平成6年からのスタートで平成14年度までに、県総体・県新人大会等それぞれに6回優勝をし、前原高校の活性化に少しでも役に立てたものと思っている）。

そして、英語コースの外国研修旅行や人文コース・理数コースの研修旅行等が実施され、学校全体が活気づいてきた。

その後、私は平成15年から高体連・平成18年から県教育委員会に勤務し、平成21年4月より、母校前原高校の22代校長として就任。そのころの前原は、部活加入率、学習面でも低迷をしていて、私の前任校長から活性化のための方策がいろいろと進められていた。その一つに同窓生や地域の方々に前原に興味を持ってもらい前原のやる気を知って貰おうとしたホームカミングデーや湛水講演会、学力向上のための各種講座等が実施されていた。

私はこの素晴らしい講演行事や各種講座は継続して実施し、さらなる学校活性化のために、より効果のあるスポーツの活性化に取り組むことにした。体育科を中心に部活動活性化のために何が必要かを話し合い、部活加入率の向上、監督、優秀な選手等の獲得に努めるとともに、学校行事等に部活動生の活躍を目指すとともに基本的生活習慣の徹底、つまり「凡事徹底」をやることによって学校生活の楽しさや素晴らしさを伝えていった。そして少しでも成果が出てきたことには皆で賞賛し、先生方のやる気を高めてきた。このように、「頑張っている先生方の姿が生徒たちに伝わると自ずと生徒も頑張るようになる。」と私は信じて前原の活性化に取り組んだ。

方策としていくつか上げると、スポーツ大会に学校上げての応援をすることによっての連帯感、信頼感、協力心等を培った。また、学校行事における生徒の発表に力を入れ、地域からの評価を得ることによって生徒たちの「やりきった」という達成感や満足感をあじわうことができた。そして、近隣中学校への学校説明会におけるPR用のDVD作成も研究を重ね、素晴らしいものを作ったり、学校見学に来た中学生には前原のコース制の説明はもちろん学校行事における生徒の活気あれる発表や部活動の素晴らしさを見て貰ったり、生徒会からの興味満載のアピール等を実施してきた。もちろんこの事は教師と生徒みんなの協力あってのものだ。

私は、いったん教育庁保健体育課に再勤務した後、平成25年4月に再度24代校長として就任。この時にも全職員と協力し合い、生徒の成長のため、スポーツの活性はもちろん、学習力の向上にも力を注いだ。私はまず、毎日の早朝講座を受ける生徒やスポーツの朝練生徒たちへの激励ということで毎朝7時から教頭とともに挨拶激励を実施し、生徒たちの表情やその日の調子の良さ等を確認しながら元気を貰っていた。さらに、本校の生徒の家庭学習時間は平均して15分程度であったことから、主要科目において、週末課題を与え、家庭学習時間の確保から習慣化ができればと始めた。「継続は力なり」とはまさにこのことがごとく2学期頃からは生徒たちから週末課題を求めるようになっていた。また、国語・英語・数学等の検定試験の受験者や合格者の数も増えてきたのも先生方の努力の賜と嬉しく思っている。

こうして、管理者、職員が一致協力して前原高校を盛り上げることにより学校力があがり、現在では前原高校受験者も大幅に増え、優秀な生徒も増えてきたことは、元校長、同窓生としてもとても誇りに思うと同時に今後も期待していきたいと思っています。

おわりに、全職員がますます元気で生徒たちのために頑張っていただくこと、今後も前原がますます飛躍することを祈念し、70周年のお祝いといたします。

名門校復活を目指して

第23代校長　**喜納　武信**

本校創立70周年を心からお祝い申し上げます。

私は昭和44年から3カ年間、本校で部活動と勉学に大いに汗を流した一人であり、常々に誇りに思う母校で、思い出多い学舎である。教職に就いて以来、いつかは母校にて教鞭を取りたいと強い希望を抱いておりましたが、その願いがやっと叶えられたのが、学校経営の重責を担う学校長としての赴任でありました。

何十年ぶりかに母校の地に足を踏み入れ、グランドに立つと懐かしい土のにおいがし、野球部で土まみれになりながら白球を追った姿が走馬燈のようによみがえり、心が弾むと同時に、これから先の学校運営に不安とやる気が交錯するのを覚えたものであります。

本校は戦後の混沌した中でいち早く郷土の復興を目指し、昭和20年11月に開校して以来、永年にわたり幾多の人材を世に送り出してきた県内でも有数な名門校として、その名を馳せたものである。しかし、昭和55年以降、近隣に与勝高校や具志川高校、球陽高校が相次いで新設され、生徒が分散することにより、部活動や学業面でもかつての名門校としての面影が薄れてきて、学校の人気が凋落し、地域や卒業生、学校職員等が危機感を抱くようになったことは記憶に新しい。

そして、平成6年度には名門校復活に向け、新制前原高校のスタートとして位置づけ、普通科の中にコース制を導入（人文コース・英語コース・理数コース・体育コース）し、学校活性化に向け、職員、PTA、地域一丸となって名門校復活への舵取りが始まりました。その後、歴代の学校長の個性溢れるリーダーシップのもと、平成18年度には教育課程やコース制の改変（文理コース・英語コース・総合スポーツコース）、制服の変更等学校改革がなされ、地域や近隣の中学校からも魅力ある学校として認知されるようになった。

このように歴代の学校長の力強い学校改革・活性化への取り組みが、功を奏しつつある時期、絶好のタイミングに学校長として赴任することができたのは私にとってはとても有り難いことであったと同時に、さらに改革を推進しなければならないという責任感のもと、学校運営に邁進しなければならないと意を強くしたものであります。

学校長として最初の発足職員会議においては、「生徒・職員相互の絆・団結力を高め、勢いのある元気な前原高校にしよう」のスローガンのもとに、①学校改革の促進により文武両道の名門復活を目指す。②学校全体の規律を確立し、学習に集中する校風を醸成する。③進路を早期決定する能力を育成し、進路決定率を85%以上を目指す。④部活動の活性化により、さらに学校活性化を促進する。⑤自分の学校に自信と誇りを持ち、生き生きと積極的に行動できる生徒の育成を目指す。の5項目の経営目標を掲げ、全職員共通理解のもと学校運営をスタートしたものであります。

特に、情熱溢れる優秀な職員集団に恵まれ、生徒指導部始め、それぞれの分掌で積極的に取り組んで

頂き、生徒達も活発に生き生きと教育活動や部活動等に積極的・意欲的に活動している姿を見ることができ大変嬉しく思うと共に、学校の雰囲気が目に見えて良くなっていくことを実感しました。

ある日、東京からテレビ取材の交渉に訪れた記者から、校門を入ると同時に多くの生徒から明るく挨拶を交わされ、大変清々しい気持ちになったと驚いた様子で話され、東京の学校では滅多にお目にかかれないと話されていたことがとても印象に残っています。

私の高校時代は、バレー、卓球、サッカー、陸上、ソフトボール等優勝旗を数多く獲得し、校長室に飾られ、県下でもスポーツ面では強豪校として名を馳せたものです。

私が赴任した時も部活動は活発で、サッカー、空手道、卓球、剣道、野球等は常に優勝争いに絡むほどの実力を兼ね備えていましたが、校長室には優勝旗が一つもなく、寂しさを感じたものであります。そのため、機会あるごとに生徒や部活生、顧問の先生方に往年の本校の活躍等を伝え、体育人の校長としては、どうしても優勝旗が欲しいことを訴えて、さらなる部活動の活性化に向け鼓舞してまいりました。部活生も顧問も懸命にその期待に応えようと厳しい練習に耐え、実力を蓄えてきました。

その成果が発揮されたのが、平成25年度新人大会において、サッカー部が見事に優勝、そして、平成26年度の県高校総体ではサッカー部、空手道部が優勝旗を獲得し、小橋川杯争奪高校生バスケットボール大会では、女子バスケットボール部が初優勝の快挙を成し遂げました。野球、卓球、剣道、男子バスケットボール、バドミントン、女子サッカー等も常に上位入賞する実力を兼ね備えており、着々と名門校復活に向け歩み出していることを実感している今日この頃であり、大変嬉しく思っているところであります。今後の活躍がますます楽しみになってきました。

結びになりますが、創立70周年を機に、さらに生徒・職員が一致団結し、完全なる名門校復活に向け、ますますご発展・ご繁栄することを心から祈念申し上げます。

私の思う学校を変えた取り組み

第19代ＰＴＡ会長　**具志川　光彦**

創立70周年おめでとうございます。私の子供が前原高校の門をくぐった年は、平成17年、60周年を迎える年でした。実は入学式典の際、生徒のだらけた様子が目立ち、自身の学生時代よりも態度が悪く感じました。もしかして生徒・教員・保護者の学校に対する思いが希薄になっているのかと思ってしまうほどでした。

しかし、当時の校長も当時のＰＴＡ会長であった私も、学校の現状を改善するにはどのようにすればよいか、考え続ける日々でした。保護者が学校に興味を持つために、まずは学校に足を運ぶ機会を増やそうと、ＰＴＡ総会、学校説明会を数回開きました。すると例年50人前後だった参加者が、450人以上にものぼり、保護者が学校に足を運んでくれている実感がありました。3年に一度おこなわれた体育祭でも、保護者・地域の方々でスタンドの観覧席が埋め尽くされ、生徒とともに大いに盛り上がった体育祭になったとの声を職員の皆さんからいただきました。

生徒指導困難校のイメージを変えるため、制服のリニューアルの提案がありました。18年度の一年生より制服が変わり、お洒落で可愛いと、周りの中学生からも好評でした。また学習面も大幅に改善されました。特進クラスでの取り組みに力を入れることで、特進クラス全員とそれ以外の生徒もセンター試験を受けるようになりました。環境整備の面では、校門に花壇をつくり、前原高校のイメージを明るくすることに成功。また、グラウンド側に通行道路を作ることで、生徒の移動等で騒がしくなりがちだった廊下も静かになって学習環境が整い、落ち着いて授業を受けられるようになりました。湛水講演会やホームカミングデーがスタートしたのもその頃でした。

このように色々な学校を改善するための取り組みのおかげで、今のような素晴らしい前原高校になったと思います。保護者の皆様、教職員の皆様、地域の皆様の協力があったからこそ、変化を遂げることができたと思います。これからもどうぞ支えてください。

70周年を記念して、在校生、卒業生、教職員、地域の皆様のご活躍とご発展を御祈り申し上げます。

子供達にバンザイ

第20代ＰＴＡ会長　**大野　紘詩**

沖縄県立前原高等学校創立７０周年、誠におめでとうございます。

戦後の荒廃した混乱の漂う中、全てを失い、物の無い、生きる為の術も何も見えない中、ゼロから本校創立に向け頑張った諸先輩方の偉大なる功績は誠に顕著であります。７０年の歴史の歩みは偉大な足跡となり多くの人材を輩出しています。創意工夫した歩みは今も脈々と続いております。

学校周辺が大きく変わってきました。学校の廻りの木々花々は枝打ち、剪定され、見える、見られる、見せる、応援が出来る学校へと気が大きく変わってきた。担当職員のご尽力が、思いが、子供達の自のエネルギー高める場に作り上げています。大変素晴らしく誇りに思います。

前原高等学校のさらなる発展が見て取れて、只々心踊るばかりであります。

私達ＰＴＡも、**輝かせ前原高等学校、子供達を成功させよう**のスローガンでの活動となった。

子供達（わらばぁたぁ）　育（すだ）てぃてぃ　黄金者（くがにむぬ）　つくてぃ

御万人（うまんちゅ）の世（ゆ）ぬ　宝（たから）なさな

人の力は無限大、子供達の大きな力にバンザイの尽きない思いであります。

やれば出来る　教えれば解る　育てれば育つ　豊かな芽を持つ子供達は天才です。

夢があるから生きられる、実現できるから頑張れる。

初志貫徹　初志貫徹　ぶれずに自分を信じてプラン・ドゥ・チェック・アクションのＰＤＣＡサイクルでやって行くしかない。自分のやりたい事をまず決めろ！目標、目的、夢を持て！しっかり考える力を身につけよう。

ピアサポーターの皆様、元気で頑張っていますか。安心して安全に過ごせる、学べる、ちむ心が見える信頼溢れる学校づくりは私達皆の願いであります。目配り、気配り、心配りは私達沖縄のウトゥイムチぬ心です。

自分づくりが人づくりの原点となります。ちむ心見せて頑張って行こう。

人（ひとぅ）のちむ心（ぐくる）　心（くく）る持（む）ち柔（やわ）でぃ

力（ちか）ら湧（わ）ち出（ん）じゃす　友（とぅむ）ぬ力（ちから）

――皆への思いを綴る琉歌としました――

「制服の改定」への道のり

旧職員　平山　政明

平成17年、前原高校は、学校を刷新すべく、教育課程の見直し、学科コースの再整備、生徒指導の強化が必要とされていた。その中で「前原高校を一層魅力ある学校にするために、次年度から制服を新しくする。」と当時、松根校長が強く希望したことが大きな制服改変への弾みとなった。

生徒からも新しい制服を望む声が多かったので、その年生徒会顧問であった私には制服改定の話は嬉しい事であった。職員の多くは賛同した。ただ前原高校同窓生の職員、また同窓会は内心複雑な思いがしたと思います。長い歴史と伝統を持つ学校の制服を変えることは、校舎改築とは違い、いかに大きな英断を必要としたかと想像に難くないから。

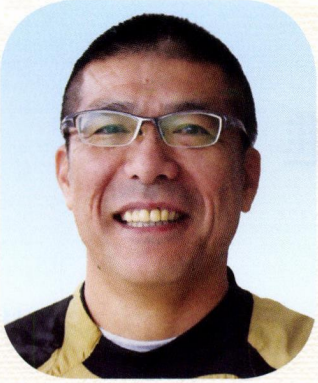
教頭先生を筆頭に、私も制服委員会の一員となって事に当たることになった。５月に制服検討委員会を立ち上げ、まず制服販売店、生徒職員から制服改定のアンケートを実施、多角的に検討することになった。夏服、冬服の色や形状（男女はブレザーにするのか）ネクタイ、リボンなど検討項目は多岐に渡った。アンケート結果からデザインの大枠、素材の良選、制服業者への要望事項を職員会議に詔った。６月中旬には制服業者への事前説明会、そして５社がプレゼンテーションを行った。

業者がそれぞれ夏服冬服２点づつの見本を作成し、特に生徒指導上から夏服はシャツ出しや、異装がしにくいものなど、ポロシャツとＹシャツの工夫を示してくれた。プレゼンテーションは価格、素材、色、デザイン、耐久性、撥水性等で数値化して評価しました。

それから１ヶ月間、職員室の渡り廊下に各業者の案を展示し、生徒職員に吟味してもらい再度アンケートを実施。プレゼンテーションとアンケート結果、職員の様々な意見と委員会を経て、３業者に絞り込み、８月の職員会議で尾崎商事と渡久地縫製に最終決定となりました。非常に大変な作業でした。その後エンブレムや事細かな微調整を経て、中学校向けのパンフレットを作成しました。

11月11日の創立記念日には職員から推薦された男女２人が新しい制服のお披露目。拍手と羨望の声が上がりました。２人にはポスターのモデルとなってもらい、近隣中学校に配布し掲示されました。12月には制服業者は制服販売指定店と契約を交わし、制服関係はすべて生徒指導部へ引き継がれ、制服検討委員会の仕事は終わりました。

新しい制服を着る生徒も長い伝統ある肝高の精神を継承することを願っています。



前高復活の10年

本校職員　田村　正人（36 期生）

私は、本校 36 期卒業のＯＢ職員である。平成 19 年の 4 月、中学校から転勤に伴い母校前原高校に赴任した。当時の本校のイメージは、地域・中学生から印象が悪く、行ける学校がないから前原高校に進学した生徒が殆どで、目的意識がないまま学校生活を過ごしているため、勤怠状況が悪く、遅刻、欠席、特に、欠課は 2 万回を超え、生徒指導上の停学処分を受ける生徒が年間 100 人を超えるなど、生徒指導困難校であった。

創立 60 周年を境に、本校のイメージを変えたいとの思いから長年親しんできた制服をブレザーに替えたことは、本校職員の「熱い思い」と近隣中学校へのアピールに繋がったと思う。また、本校ＯＢの元校長を中心にビジョン委員会を立ち上げ「本校が抱える問題点をどう改善していくか」・「生徒にどう学校に目を向けさせるか」・「活力ある学校にするために何が必要か」絶え間なく議論が続き管理者との意見の相違もあったが「前高を変えたい」との思いが職員の団結力になり「フットワーク・ネットワーク・チームワーク」を合い言葉に、取り組みに繋がって行った。

地域・生徒から信頼される「魅力ある前原高校」にするために、学校生活の充実が上げられ、学校周辺の美化活動・地域ボランティア、沖縄マラソンの応援、近隣中学校に出向いての学校紹介・部活リーフレット作成等を積極的に行うことで学校に対する評価が高まり信頼を得られるようになった。また、生徒指導上の問題に対しても、生徒・保護者からの批判を受ける場面もあったが、粘り強く対応し、生徒指導方針を変えることなく真摯に取り組むことで、今日の落ち着いた学校生活が送られている。

「活力ある前高」を目指すため、どんな生徒でも積極的に参加できる行事を作ろうと生徒会と体育科が中心となり「前原カップ」球技大会をお昼時間に行うことにした。そうすることで帰属意識が高まり校外へ出る生徒が減少、生徒指導を受ける生徒も徐々に減少し、生徒に役割を与えることで責任感が芽生え、全ての学校行事が活発になり、成功を修めるようになっている。

高校スポーツ界の「前高旋風」古豪復活、平成 27 年度県高校総体男女総合 5 位入賞、その道のりは、「あいさつ・行動力・自信」を身につけることで「肝高精神」を確立したこと、また、**「勢」「昇」「極」「動」「絆」「輝」「挑」「信」**、毎年一文字のテーマを決め、心を一つにチーム前原で高校界の頂点を目指したことによって達成された。

前原高校が誕生し創設 70 年を迎えた。厳しい時代を乗り越えてきた教育理念「教学一如」が引き継がれ、伝統ある前原高校は、今や母校愛に満ち溢れ自信と誇りある前原高校になっている。「前高健児は、永遠である」。

「一期一会」の協働で前進

旧職員　運天　直樹

創立70周年おめでとうございます。
今後ともますますのご発展をお祈り申し上げます。

正直、悔しい異動だった。前任校で「美ら島総体2010」の強化指定校となった矢先の事であったからだ。悔しさに打ち克つために、毎朝の車中で「今日もメンタルトレーニング!!」と自分自身に言い聞かせながら出勤したことを覚えている。

実は前原高校は、私が中学３年の頃に進学を希望していたが、小学区制の時代に新設校が出来ることになり、その希望がかなわなかった学校であった。そのことを就任式で話し、私の前高生活がスタートした。

当時は、３年生が学ランとセーラーの旧制服、１．２年生が現在のブレザーの新制服であった。なかなか（いや相当に）生活指導に手こずっていた時期であった。

そこで、なんと赴任当初から生徒指導部としての役割をいただいた。ある意味、びっくりだが、毎日の生徒や保護者との超激辛コミュニケーション、これもメンタルトレーニングになっていった。（結局７年間、生徒指導部室で過ごすことになったが・・・<笑>）

しかし、今振り返れば、同僚や管理者・生徒たち・PTA役員のみなさんや保護者、そして地域の皆さんに、本当に恵まれたと思う。「これは偶然か？」いや「神様の仕業だろ！」と思うほど素晴らしい出会いの連続であった。今、この原稿を書きながらも、その一つ一つが思い出される。

「もっと学校を、生徒を良くするためには？」という言葉が、日々の茶飲み話であったり、after 5では毎回毎回それが酒の肴というくらい、前高が好きな人々と同じ刻を過ごせたのだ。

さて、実際の学校生活であるが、初年度は特に慣れない環境の中、染髪や化粧、２種類存在する制服の着こなし方指導、突発的に起こる問題行動への対応など、生徒たちとのやりとりに一喜一憂した。いや個人的には一喜三憂する日々を送りつつ、数々の伝統を築き上げてきた旧制服での最後の卒業生を喜びの涙で送り出すことができた。

２年目は、全学年が同じ制服になったことで、今一度伝統校としての誇りを「着こなし」で表現するため、冬服時のみ着用だったネクタイ・リボンを「年中着用」として、全職員に理解してもらい、徹底して指導に当たってもらった。当時は、染髪や化粧、そしてシャツをスラックスやスカートの中に入れさせる指導に手を焼いている時期でもあったにも関わらずである。その指導部も、生徒指導主任等を経験したメンバー（人相は悪いが、カバーリングのできる面子）をそろえて頂いたことも、非常にありがたかった。他の部署には負担をかけてしまったが、ことある度に授業を緊急集会に切り替えた時期であり、学校を落ち着かせることが課題であった時であり、この面子だからこそ乗り越えられたと思う。順子校長には、時に「あんたたち、いい加減にしなさい」と叱咤激励されたものだ。

３年目には、ビジョン委員会なるものが設置された。メンバーは「有志」というからおもしろかった。半嶺教頭が音頭を取ってのものだが、後輩に未来を示すベテラン、先輩に希望や夢を話す若手、母校愛漲る前高 OB 教師が融合し、そんなお互いのベクトルを整え、職員全体が足並みを揃えていったことを思い出す。生徒指導のみならず、教科指導、進路指導から部活動・行事など、すべてに一本の芯を通していったように感じていた。

この頃、各中学校に出向いての学校説明会にも連動して力が入っていった。部活動と行事の活性化、生活指導の徹底と各コースの特色と方向性など、前高ビジョンを積極的に中学生にアピールしていったのだ。ただ派遣された職員は、兄貴こと田村先生など生徒指導部の強面二人だったので、中学生の顔に笑いは少なかったかもしれない。

４年目以降、制服の着こなし、勤怠、行事に対する生徒の表情が落ち着きはじめた。そこから遠足が復活し、校内マラソン大会でも救護車に乗る生徒もなく、全員が完走するなど学園生活の充実ぶりがうかがえるようになった。指導部にも少しずつ余裕が出始め、これまでの職員間の協力体制の賜だと感じる場面が増えてきた。そう、分掌や教科・先輩と後輩といった間柄で、これほどサポート＆カバーが自然に、さりげなく、当たり前のようにできたのが本当に不思議であると同時に、私たちにとって心強かった。

例えば、一人の生徒の問題行動に生徒指導部が動くと、担任はもちろん、連動するように教育相談がフォローにまわり、るり子先生のカウンセリングが行われ、お互いの間で共通理解と指導方針「どうする？お願い！ OK。こうしようね！」が導き出されていった。　また、生徒指導部と進路指導部との絶妙な連携もあった。部活指導などでもコミュニケーションがとれていたこともあり、お互いのベクトルはつねに同じ方向に向いていた。だから、全体集会で話す内容に前半と後半のようなセット感覚があったと思う。実際、お互いの話す内容を事前（約 34 秒前）に確認していた。

教務部は、生徒指導部が動きやすいように行事日程を組むなど、つねに事前の打ち合わせを密にしてくれた。環境美化部も、わざわざ時間をつくり、指導対象の生徒と一緒になって汗かき作業・ゆんたく指導をして頂いた。卒業式後、山城さんや宮城さんにお礼をする生徒を見て、ちょっと涙したことを覚えている。

各教科担任も、自らの授業の合間に生徒指導室に顔を出し、なんと個別指導を丁寧にしてくれた。そのおかげで、指導生徒のテスト点が上がることも珍しくなかった。

また、指導室を気遣いコーヒー等を差し入れをしてくれる職員もいて、眉間にしわを寄せる當山先生に笑顔が戻り、リフレッシュすることも少なくなかった。

生徒指導部の西村先生は、部活での悩みを、先輩であり副顧問の禰保・中村の両先生に相談し、無理なお願いをする事が毎朝のルーティーンだった。しかし、そういった日頃の（良質な？）コミュニケーションや、時には５時以降の臨時職員（食飲）会が、お互いのスクラムの強さになっていたのだろう。

最後に、７年間お世話になった前原高校に、心から感謝したい。自信を持って制服を着こなし、明るいあいさつ、そして部活動面からアプローチしつつも文武両面で学校生活を充実させてきた生徒たちにも恵まれ、改革という言葉を使わずに「みんなで協力して、みんなの学校を創る。そして生徒と共に成長する。」という素晴らしい経験をさせて頂いたことに。

「チーム前原」と共に走る
～県新記録 40年ぶり優勝～

陸上部 **山城　興平**（70期生）

私が前原高校に入学した2012年。その頃の前原高校陸上部は部員数が5、6名で決して陸上競技が強い学校とは言えませんでした。しかし陸上は個人競技だ、陸上部のある高校に入って一人で頑張れば強くなれるだろう。そう思って入部しました。

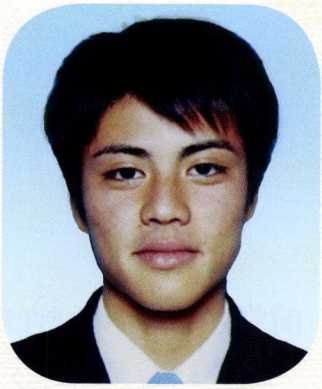
いざ練習が始まり、一番最初に感じたことは自分自身を追い込む難しさです。元々怠け癖があった私は、一人で練習メニューをこなそうとすると最後の一本を怠けたくなります。そんな時に、他の部員からの「頑張れ！」の一言が力になり、どんなに少ない人数の応援でも最後の一本が一番良い走りが出来ることも多々ありました。その時に部員の大切さ、試合ではたとえ個人種目でも「前原高校陸上部」、そして「チーム前原」として戦ってるのだという意識を持つようになりました。

二年生に進級し、私はキャプテンを任されることになりました。このメンバーならチームとして県の上位に立つことも難しい事ではないと思い始めていたので、自信を持ってキャプテンを引き継ぐことが出来ました。先輩という立場になったこともあって気が引き締まり、チームをまとめていく責任の重さを実感しながら日々練習に励んでいました。その頃は部活動だけでなく学校行事にも深く関わることが多く、苦手な勉強もどうにか両立させようと必死になっていました。

そして迎えた高校最後の年。三年生になった私には目標がありました。得意とする800mで、全ての県大会で優勝することと大会記録を更新することです。ちょうど伸び悩んでいた時期で練習に集中することに必死だった中、シーズンがスタート。最初の大会では自己ベスト更新かつ約20年ぶりに大会記録を更新することが出来ました。走り終わると同時にタイムを見た私は無意識に両手を上げて試合直後とは思えないくらいの大声で何かを叫んでしまいました。この時のことは、一生忘れられないと思います。

それから一ヶ月が経ち、いよいよ高校最後の高校総体が始まりました。前回大会で大会記録を更新したのがきっかけで周りからの期待は高く、試合直前にはアナウンスでも紹介され、目立ちたがり屋の私としては最高のモチベーションで試合に臨むことが出来ました。今大会の敵は自分自身のみと考えていたので、スタートから相手を気にせずに自分の走りができました。この大会でも約10年ぶりの大会記録を更新することができ、色々な方々からお褒めの言葉を頂きましたが、ゴール後に少し余裕があったため、タイムと試合内容は満足いく結果とは言えませんでした。それでもこの記録は、南九州での三位入賞、全国高校総体への出場、長崎がんばらんば国体への出場につながりました。とても貴重な体験させていただくことができ、色々な方々との交流もできました。

陸上を始めたばかりの頃。市内の小さな大会に出るだけで吐きそうになるくらい緊張してしまっていました。そんな私が前原高校に進学し、陸上名門校のような特別な指導を受けることがなくても、沖縄県を背負うことが出来るほどに成長出来ました。陸上は、日頃の努力の積み重ね、やる気次第で人は大きく成長できるのだということを教えてくれました。これからも私の人生の中では陸上はかけがえのない存在になると思います。



「信じること」
～三冠達成～

サッカー部　**田里　駿**（70 期生）

前原高校 70 周年おめでとうございます。私は、去年まで前原高校に在学をしサッカー部のキャプテンを務めていました。私たちは沖縄県の主要の 3 大会で三冠を取ることができましたが、それを 70 期生としてこの快挙を達成できたことは何かの縁だと思います。

私たちが三冠できたのは、やはり両親や監督、コーチや先輩方や後輩、学校や応援してくれるたくさんの人がいたからです。前原高校サッカー部があるのもそういった人達の支えがあったおかげです。それはどの部活にも言えることです。やはりどのスポーツも感謝する事を忘れていたら強くはなれないと思います。

私たちは試合はもちろん日々の練習にも常に全力で取り組みました。ただ、私は日頃の行いも最終的には勝敗を左右することがあると考えています。

たとえば日頃の学校での生活態度を正す、挨拶をしっかりする等のことです。それと私たちは毎週学校の清掃活動をやっていました。それにより試合では運も味方をし、PK 戦などを乗り越え勝利を勝ち取れると思います。

私達の三冠という快挙は、周りには「いいメンバーが揃ってたから余裕だった。」などと言われてたりしましたが、決してそんな事はありません。私達が 3 年生になってから、このチームは練習試合でも大会でも無敗を誇りました。しかし、夏休み入って少しすると負けが続き、時には大敗するなど、勝てない時期がありました。それはチームみんなの雰囲気も悪く、仲間同士ぶつかったりして困った時期でもあります。それでもどうにかしないといけないという気持ちはチーム全員にあったので、話し合いを増やし、悪いところ良いところを何度も言い合い、また足りないところを見つけ、それを補うためにどうすれば良いのかなどを考えました。自分達の良い状態を知っているからこそ元に戻れるようにみんな真剣でした。

監督はキャプテンである私やみんなに「大丈夫！　信じろ。」と言い続けていたのを覚えてます。その時はあまり何とも思いませんでした。しかし今考えると、監督がチームのことを考え、信じてくれ、1 番わかってくれていたような気がします。

そうして私たちは三冠を達成し、全国の舞台に立つことができたのです。

私が高校サッカーをして思ったことは強くなるためにはチームを強くすることだけでは無理だということです。監督、コーチ、親、周りや学校や地域の皆さんが応援してくれることによって選手のモチベーションも上がり、「やってやるぞ」という気持ちになり、頑張ることができるのです。

高校三年間サッカーをして、キャプテンを務める中で、スポーツにおいて「信じること」、「感謝すること」がとても大事だということを学びました。この二つは絶対どのスポーツにも当てはまると思います。今前原高校でスポーツをやっている後輩達の皆さんは、この 2 つをいつでも忘れないで頑張って欲しいです。

前原の名を全国へ

空手部　**前堂　大樹**（69 期生）

私は高校生の頃、空手部に所属していました。幼い頃から空手をしていたわけではなく、部活動紹介の時に、「格好いい。」と思った、ただそれだけの理由で入部することを決めました。これが前原高校空手部との出会いでした。

素人で入部した私は、県でもトップクラスの練習量についていくことだけできつい毎日でしたが、決して諦めることなく日々食らいついていきました。すると、二年生に進級して最初に行われた夏季大会にて個人組手の部での優勝を成し遂げることができました。この時私は、「素人でもここまでできるんだぞ。」という喜びの気持ちが溢れたの同時に、前原高校空手部に入って本当に良かったと改めて実感しました。

二年の夏が終わり、私はキャプテンを務めることになりました。チームを引っ張ることの大変さ、キャプテンとしての責任の重さなどを知ることで、より一層意識を高めて部活動に取り組むことができました。新一年生が入ってきたことで、最初は環境の変化によって、チームはバラバラでしたが、日頃の厳しい練習を一緒にこなすことで団結し、11 月に行われた全九州新人大会では南九州ブロック、全九州ブロックと共に団体組手で 3 位という成績を収めることができました。

そして迎えた最後の全国インターハイでは、数々の強豪校がいる中、私達前原高校はシード上がりの 2 回戦からのスタートでした。これまでやってきたことを全て出し切って戦い、2 回戦、3 回戦と相手チームを圧倒して勝利することができました。そしてついに沖縄県勢 28 年ぶりとなる、男子団体組手ベスト 8 まで上がることができました。優勝校である浪速高校に敗れてしまいましたが、沖縄県勢の組手の強さ、そして前原高校の名を全国に知らせることができたと感じました。

これまで、空手を通して経験したことは、私にとって貴重なものです。これからも前原高校の OB として空手部を支えていきたいと思っています。

歴史はあるものではなく、自分達でつくるもの

空手部　**伊藤　大賀**（70 期生）

昨年行われた南関東インターハイの空手競技において個人組手 3 位入賞することができました。自分の目標であった全国大会入賞ができてよかったと思います。大会前の練習ではどんな相手がきても自分のペースで試合をする練習をしていました。また、顧問の田村先生からは「歴史はあるものではなく、自分達でつくるもの」だと言われてきたのでそのことを信じて試合をしました。

しかし、団体組手においては 1 回戦負けという不甲斐ない試合をしてしまいました。チームの調子は良かったものの運が悪かったと思います。最後の団体戦で 1 回戦負けは今まで一番悔しかったです。でもチームみんなが一つの目標に向かって頑張ったことは、何よりも嬉しいことでした。南関東インターハイは、自分にとって一番嬉しい思いもしたし、一番悔しい思いもしたとても思い出に残る大きな大会でした。

「歴史を作ろう」を空手部の合言葉に

空手部　**玉城　大護**（70期生）

私達空手部は、九州・全国制覇を目標に日々精進し、「歴史を作ろう」という言葉を部の合言葉に、皆で日々切磋琢磨していました。

私は岡山の空手強豪校に進学しましたが、上下関係などに悩み挫折して、沖縄に戻ることを決断しました。その時に手を差し伸べてくれたのが、前原高校の田村正人先生でした。一浪して受験し直さなければならないのか、もう空手もできないのでは、と不安を抱える中、空手を続ける環境を与えてくれた田村先生には、言葉で表せない感謝の気持ちでいっぱいで、入学してから一大会ずつ、結果で恩を返していこうと決心しました。練習は九州・全国を見据えての、とても厳しいものでしたが、空手ができる幸せを噛み締めながら取り組むことができました。

そして迎えた高校２年のインターハイでは、個人組手準優勝・団体組手優勝と最初の恩返しをすることができました。その後の全国大会では団体組手５位に入賞し、納得のいく結果を残せました。

前主将の前堂大樹先輩からキャプテンを引き継ぎ、新チームがスタートしました。昨年の記録よりも良い結果を残そうと気合が入っていました。

これまで先輩がいた緊張感のある環境が変わったことでチームがまとまらない時期もありました。しかし、先輩方が残して下さった伝統をさらによりよいものに進化させなければならないことを改めて確認し、部員全員で心を入れ替えました。そうすることにより、自主練習や朝の練習にも気合いが入り、練習に熱気が戻ってきました。隣にいつも仲間がいて、その仲間はライバルでもあって、思いやりと競争心を日々育てることができました。

月日が経つのは早く、すぐに最後の県高校総体がやってきました。主将としてできることは自分の背中でチームを引っ張ることだ、という思いで戦いました。初日から団体形・個人形で準優勝し良いスタートが切れ、2日目の団体組手でも勢いそのままに３連覇を成し遂げ、最終日の個人組手につなげることができました。個人組手でも調子がよく、順調に勝ち進みました。そうして迎えた決勝戦は同校対決、私と伊藤大賀の試合となりました。私と伊藤は小学校の頃からのライバルです。手の内を分かり合っているため、苦手意識もありましたが、接戦の末、私は勝利することができ、最高の締めくくりとなりました。田村先生に最後の大会で恩返しができ、ついてきて本当に良かったと思いました。

空手部の最終的な実績としては、県高校総体団体組手３連覇・総合初優勝、新人大会団体組手４連覇・総合初優勝をおさめることができました。勝者としての誇りと伝統を受け継げたと思います。後輩の皆さんには、これ以上の成績を期待すると共に、最大限の応援をし続けたいと思います。

私を成長させた生徒会活動

平成 26 年度生徒会副会長　**外間　杏佳**

私は高校１年生の２学期から、３年間、生徒会執行部として活動をしていました。生徒会の活動は、行事の裏方などが多く、私が執行部に入って初めての活動も後夜祭の準備で、私は毎年恒例になっている光文字の土台を作る係でした。同じ時期に生徒会に入った人が２人いて、同じ係だったのですが、慣れていない私は、２人との会話もなかなかできず、おどおどしていました。でも、日が経つうちに、会話もしながら仕事が少しずつできるようになりました。この年の光文字の作成方法は前年度と違う方法だったので、先輩方も先生方も苦戦していました。後夜祭前日まで学校に夜遅くまで残るなど苦労して完成させました。作成途中は本当にできあがるのかという不安が大きかったのですが、完成したときは、これまで感じたことのないような大きな達成感が得られました。その達成感は、今後も生徒会を続けていこうという気持ちにさせてくれました。それから私は引退まで、色々な行事の裏方として一生懸命頑張りました。

２年半の生徒会活動を通して１番印象に残っているのは、私が２年生のときの先輩方の卒業式です。卒業式の準備は毎年恒例のくす玉作りという大きな仕事に挑戦しました。くす玉作成では、執行部のメンバーも忙しくて、なかなか全員集まることができず、２、３人で話し合いながらの作業という日もありましたが、それぞれが役割分担をしながら協力し、作り上げることができました。卒業式前日のリハーサルでくす玉の開き具合や、取りつける位置を調整している時は、私達が作ったくす玉で、先輩方の卒業式を祝えるのだと実感し、誇らしい気持ちでいっぱいになりました。卒業式当日は、式が始まったときから、くす玉がちゃんと開くか不安で緊張していましたが、くす玉は予定通り開いて卒業する先輩方をはじめ、会場の皆さんを喜ばせることができました。卒業式後に３学年の担任の先生に感謝の言葉を頂いたときは、私達がこのくす玉作りに携われたことを、とてもありがたく思いました。

数多くの生徒会活動を通してとても感じたのは、前原高校のあたたかさです。おきなわマラソンの街頭応援ボランティアでは、サッカー部の皆さんが生徒会より早く学校へ来て、給水場作成のためのテーブルを運び出してくれたり、各部のマネージャーの皆さんがキーパーを準備してくれたりなど、多くの協力を得て、スムーズにボランティアを行うことができました。新入生歓迎球技大会では、朝から放送部の皆さんがアナウンスの練習をしていたり、行事の裏方である私達の進行の手助けを先生方がしてくれたりしました。また２年生、３年生の皆さんが１年生の緊張をほぐしながら、全力で行事を盛り上げてくれます。そのような支えや、協力は行事に欠かせないもので、それらがあったから

こそ、各行事で成功をおさめることができたと思います。

生徒会の活動は行事だけではありません。地味ながら続けている活動に週番集会があります。生徒会は週番集会を開くため、毎朝早くに学校に来て準備を行っていました。週番集会は生徒に関する連絡を伝える、毎日の大切な集会です。この集会は、各クラスの週番の皆さんが集まらなければ開くことはできません。集会が長引いて、HR 教室まで走って帰ることになることも多かったですが、毎朝の大切な集会だからこそ責任感をもって仕事に励むことができました。

さらに前原カップという取り組みもあります。前原カップは昼食時間に行う球技大会で、進行を行う私達生徒会執行部は、授業が終わったらすぐに体育館に向かいます。そのため、お昼ご飯をゆっくり食べられず、とても大変でした。しかし、試合開始の時間が近づくと練習を始めたり、応援のために集まったりと、執行部以外の生徒も自主的に取り組み楽しんでくれます。

このような生徒会の取り組みを通して、生徒全体が積極的に学校行事に参加してくれることは、とても嬉しく素晴らしいことだと思います。私は高校生２年半の生徒会活動を通して、１つのものを作り上げることの楽しさや、支えてもらえることのありがたさを学ぶことができ、自分自身も成長することができました。私を成長させてくれた前原高校のあたたかさが、これからも受け継がれることを祈っています。そして生徒会には、前原高校をもっと活気のある学校にするためにも、色々な行事を引っ張り続けてほしいと思っています。

「色違いの現（ラップ）」

第 44 回 全沖縄青少年読書感想画コンクール 優良賞
3 年 6 組　砂川 純音

「万座毛」

第 13 回「おきなわの観光」絵画コンクール 入選
2 年 4 組　松島 鈴夏